

古畑徹著

## 『渤海国とは何か』

渤海は、七世紀末から一〇世紀初頭にかけて満洲や沿海州、朝鮮半島北部に存在した国である。この国の歴史をめぐっては、現代のいくつかの国々がそれぞれ異なった思いを込めて解釈を試みる。渤海を朝鮮民族の歴史の一部として捉える韓国と、自国東北部における地方政権のひとつとみなす中国との歴史の争奪戦も繰り広げられた。本書は、極めて少ない渤海関連の文献史料に出土文字資料や発掘資料による知見も加えながら、一国史を乗り越え国際的な地域の枠組みの中で渤海史を描こうとする労作である。

本書は四つのパートで構成される。一つ目の「渤海史概説」では渤海の基本情報と歴史が述べられる。まず高句麗遺民の大群衆により建国された渤海が、高句麗人や北部・南部靺鞨の諸族で構成された多種族国家であることを紹介する。唐と契丹・突厥の対立の中で独立し、新羅との緊張関係に対応して日本と国交を結ぶなど、その歴史は

国際関係の影響を受けて展開したと論ずる。

次の「ユーラシアのなかの渤海国」では、西嶋定生が唱えた東アジア文化圏を批判的に継承しつつ、その中に渤海を位置付ける。渤海は漢字・儒教・仏教など東アジア共通の文化要素を持ち、唐より冊封され、唐の制度を導入していた。但し、渤海は唐中心の世界では外部に置かれる独立的な存在で、国内的にも小中華帝国の意識が顕著であったという。東部ユーラシア（中国・北アジア・中央アジア・満洲など）世界の観点からみると、渤海は唐により北方遊牧民と同じく分類され、突厥・契丹・奚や安祿山勢力など遊牧世界と影響し合い、西方世界ともつながっていたとする。

三つ目の「東北アジアのなかの渤海国」では、歴史地理的空間としての東北アジア（中国東北部・朝鮮半島・ロシア極東）の中で渤海史を位置づけ直す。建国当初は旧高句麗の勢力範囲における高句麗遺民を糾合すべく高句麗の継承者と自己主張していたが、後には北部靺鞨への領域拡大に伴い肅慎を核とする「北方東夷」の統合意識が重視されたと指摘する。また、渤海と新羅の併存により東北アジアの世界は南北に分

割され、東北アジア北部のあり方は渤海以前と以後とで大きく変わったと述べる。

最後の「海洋国家としての渤海国」では、渤海人が活動した日本海（韓国名「東海」と黄海・東シナ海の海域における渤海の位置付けを確認する。日本に派遣された渤海使の航路の変遷より日本海を横断する自由な内部交流の様相を読み取り、渤海の滅亡により古代の独立した環日本海世界の崩壊が招かれたとみる。また、渤海の商人団は九世紀における環黄海・東シナ海の東アジア交易圏の創出に寄与し、彼らの交易活動は黄海北部における契丹・女真のそれにながったという。

本書は、渤海が多種族からなる多元的で複雑な国家であることを前提に多面的な視点から考察を展開し、渤海史を理解する上での視座を讀者に提供する。一国的観点にとらわれず、歴史の実像の解明を目指す本だけに日本史・東洋史に限らず多くの方に本書の一読を薦めたい。

（四六判 二四〇頁 二〇一八年一月）

吉川弘文館 税別一七〇〇円）

（金玄耿 京都大学大学院文学研究科

博士後期課程）